

特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 庭園部会（第30回）

議事録

日 時 令和4年3月21日（月祝）10:00～12:30

場 所 西の丸会議室

出席者 構成員
丸山 宏 名城大学名誉教授 座長
仲 隆裕 京都芸術大学教授 副座長
栗野 隆 東京農業大学教授 (リモート)
高橋知奈津 奈良文化財研究所研究員

オブザーバー
野村 勘治 有限会社野村庭園研究所
白根 孝胤 中京大学教授 (リモート)
平澤 毅 文化庁文化財第二課主任文化財調査官 (リモート)
洲崎 和宏 愛知県民文化局文化部芸術課文化財室室長補佐

事務局
観光文化交流局名古屋城総合事務所
教育委員会生涯学習部文化財保護室

議 題 (1) 名勝名古屋城二之丸庭園余芳移築再建事業について
(2) 令和4年度の二之丸庭園の修復整備について

配布資料 特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 庭園部会（第30回）資料

事務局	<p>1 開会</p> <p>2 あいさつ</p> <p>本日は、年度末のご多用の中、また 3 連休の最終日にも関わらず、第 30 回の庭園部会にご出席いただき誠にありがとうございます。今回の部会ですが、愛知県のみん延防止等重点措置期間の最終日であることから、対面会議とオンライン会議を併用するかたちで開催させていただきました。皆様には開催に向け、ご協力いただきありがとうございます。本日の部会は、議事が 2 つです。1 題目の名勝名古屋城二之丸庭園余芳移築再建事業については、前回の部会でいただいたご意見を基に資料をとりまとめ、先日文化庁へ提出しているところです。今回は第 4 章の手水等の復元、および第 5 章に整備設計を追加しています。引き続きご意見をいただき、資料をかためていきたいと考えています。2 題目の令和 4 年度の二之丸庭園の修復整備については、前回の部会のご意見をふまえ、内容を絞って付議するものです。限られた時間ではありますが、本日もどうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>3 構成員、事務局、オブザーバーの紹介</p> <p>4 今回の議事内容</p> <p>資料の確認をいたします。会議次第と出席者名簿が A4 で 1 枚ずつです。資料として、資料 1 は名勝名古屋城二之丸庭園余芳移築再建事業が A3 の横で綴ってあり、最終ページが 82 ページです。58 ページでスタートして 82 ページまでをお付けしています。資料 2 として、A3 横で 2 - 1 から 2 - 4 まで 4 枚です。</p> <p>では、本日の議事に入ります。ここからの進行は、丸山座長にお願いいたします。</p>
	<p>5 議事</p> <p>(1) 名勝名古屋城二之丸庭園余芳移築再建事業について</p>
丸山座長	<p>それでは、資料に基づいて説明をお願いしたいと思います。ご意見等を伺いたいと思います。</p>
事務局	<p>まず、資料の訂正を 1 点お願いします。資料 1 の 60 ページです。左上の参考事例で、写真を 2 つ載せています。このキャプションについて、徳川園瑞龍院とありますが、この院を亭に、瑞龍亭に修正をお願いします。</p> <p>それでは、目次の 2 ページ目、第 4 章と第 5 章をご覧ください。前回から、第 4 章の 3 の手水の部分と、第 5 章の 4 以降を追加しています。今回は時間が限られますので、庭園部会に関連する内容に絞ってご説明します。</p> <p>58 ページをご覧ください。第 4 章 3 の手水等の復元的整備につ</p>

いてです。まず、二之丸庭園整備計画における余芳周辺の整備についてです。余芳周辺の整備については、先述の基本方針のとおり、余芳を移築再建する周辺の露地庭と北園池につながる部分等を行います。余芳を添景の1つとして捉えつつ、余芳からの眺望、園池との関係を考慮した動線の回復を行います。2つ目、根拠史料の取り扱いです。基本的な考え方は、遺構の保護を最優先とし、発掘調査、史資料等調査をふまえて復元的整備を行います。根拠史料としては、以下の表のように優先順位を1から4まで決めました。1番が発掘調査結果、2番が古写真、3番が古絵図、4番を類例とし、以下の優先順位に基づいて最も適切な条件を検討していきたいと考えています。

1つ目、発掘調査結果です。遺構の部分については、これまでご説明してきたとおりです。今回、手水の復元検討を行うにあたり、作業中の写真に写っていた三和土片の考察を行いました。三和土片出土状況の写真の赤丸の部分に三和土片が確認できます。この三和土片は遺物として取り上げており、報告書によると器高が19.6cmで、白漆喰で形作り、表面は小礫、粒径2~6mmを混入した赤漆喰、厚さ7~8mmを上塗りと書いてあります。三和土片外面のキャプションの写真をご覧ください。ベースが白漆喰で作っており、表面に小礫を混ぜた赤漆喰がぬつてあるのがわかるかと思えます。出土位置や石の配置から、この三和土片は手水遺構の東側の一部と考えられます。本来は、報告書に掲載されている実測図や、写真の角度、三和土片内面の写真や三和土片実測図を見ていただくとわかると思いますが、このような角度で付いていたと推定されます。上端部が平らに仕上げられていたことがわかります。上端部の幅は、4cmから4.5cmです。この三和土片は、内面と上端部と外面の上部が赤く着色されています。手水の跡の三和土は、上端部が平坦で、内側と上端部と外面の上部が赤く着色されていて、お椀のような内湾する形をしていたと考えられます。御城御庭絵図でも、三和土の上端部が平坦に表現されているので、絵図の表現と一致すると考えています。

検出された遺構の石質については、北園池の護岸の石に用いられている石から推測すると、それらと同じく名古屋城近辺の石であると考えられます。そのことを前提に考えると、塾石と水汲み石は少し青みが見られるので、北園池の護岸にもある桃取石の可能性があると考えられます。清浄石については、ほかの2石と比べて少し灰色っぽい感じがしていることと、板状に剥離した石肌をしているので、ほかの2石とは違う石であると考えられます。これについては、中根庭園さんから伊勢古谷石もしくは七華石の可能性があるという意見をもらっています。

続いて59ページ、古写真のご説明をします。同じ4章で、余芳の屋根の寸法を数値解析しています。それにならって手水鉢や燈籠の大きさや位置を推定しています。手水鉢については円筒形、燈籠は石燈籠を想定していますが、ともに地際は確認できていません。燈籠の宝珠の部分、笠の形状の判別も難しいと考えています。

続いて古絵図です。御城御庭絵図と尾二之丸御庭之図の共通した描かれ方として、余芳南西側に台座の上に据えられた円筒形の手水鉢や、3つの役石が描かれています。そして、余芳の南側に四

	<p>角型かつ生け込み型で、円形と思われる宝珠が載り、火袋を四角で描かれた燈籠があること、余芳の南東側に六角型の燈籠があることが挙げられます。御城御庭絵図の手水については、三和土の縁の一部に二重線が描かれています。</p> <p>ここで、燈籠について、白根先生から新たな情報をご提供いただいています。白根先生、画面共有をいたしますので、ご解説をお願いいたします。</p>
白根オブザーバー	<p>徳川林政史研究所が所有している尾州御留守日記という藩主の小納戸役が書き連ねている日記があります。その安政元年 6 月 15 日条の部分に、燈籠に関する記事があるのを見つけました。お役に立つかどうかわかりませんが、情報共有ということで報告したものを、画面では今、共有してご覧いただいています。安政元年 6 月 15 日条は、このとき地震があり、いくつか庭園での被害状況を書き留めている部分になります。特に燈籠の被害について、いくつか報告されている内容の記事になります。そこには、二之丸庭園のほかに御深井御庭と、新御殿の庭に設置されている燈籠についての被害状況がまとめられています。今画面共有でご覧いただいているのは、その中でも二之丸庭園に関わる燈籠の被害状況について書き留めた部分を、報告させていただいているところになります。今回、着目されている余芳の燈籠については、このひとつ書きでいうと、右から 4 番目です。余芳南の方、ひとつ同と書いてありますので、春日型の燈籠ですが 1 本被害を受けていると。特に笠の蕨手のところが損傷しているという報告があります。そのほか、霜傑の方にある春日型の燈籠や、権現山の方の燈籠、新御殿の方にある燈籠等についての被害状況も報告されています。</p> <p>ここでは、ここが損傷しているという記事にすぎませんが、安政元年の地震、6 月なので、この後もっと強い地震が 11 月に起きますが、6 月の時点での被害状況ということで、一部こういった記録がありましたので、史料を報告し、今回報告させていただいています。余芳の南の方の燈籠が、先ほど示された絵図に描かれている燈籠のことを指しているのかどうか、そこまで細かいところまで確認をしていませんので、それ以上のことはお話できませんが、このようなかたちで、当時の日記でもこういった記録があることを、今回ご報告しました。簡単ではありますが、以上です。</p>
事務局	<p>ありがとうございました。今後、資料にも反映したいと思っています。</p> <p>続いて、60 ページをご覧ください。参考事例です。これについては、二代藩主の隠居所とした徳川園を、参考として載せました。続いて類例です。類例については、余芳の復元年代に、尾張徳川家の茶道の正統であった有楽流の関連として国宝如庵と、手水について二之丸庭園の発掘調査結果や古絵図等と形状が似ており、余芳の再建図面のように東が役石に建てられている弧篷庵を挙げました。資料の右下になります。61 ページをご覧ください。そのほか、手水鉢の関係で大矢家余芳亭などをはじめ、4 例を挙げています。</p> <p>なお、国宝如庵のところで、キャプションがわかりづらいので、</p>

	<p>ご説明を追加いたします。まず茶室如庵については、左上の手水。旧正伝院書院は②番ですが、左下 2 つの燈籠と、右下の手水。茶室元庵については、まん中の燈籠と右上の手水となります。</p> <p>62 ページをご覧ください。3-2 復元的整備検討です。根拠史料を用いた復元的整備の考え方です。庭園整備計画および先述の検出遺構に基づき、手水や燈籠をはじめとした余芳の周辺整備に取り組んでいきます。具体的には、主要な構成要素としての地形、石組、園路整備などのほか、説明板等の活用を充実させるための整備を行っていきます。ここでは検出遺構等で、詳細が明らかな手水や燈籠について記載し、そのほかについては、引き続き整備内容の検討を進めていきます。まず、手水です。役石は遺構直上に、可能な限り同形状、同石質の石材を据えることを考えています。三和土については、南側が破壊されていますが、当初の形状を留めて遺されているので、遺構直上に復元的整備を行います。厚さ 50mm ほどで内面全体を赤く着色した三和土としつつ、排水を考慮した構造とします。次に手水鉢です。古写真および古絵図を参考にした大きさの台石、円柱状の手水鉢を遺構直上に据えることとします。手水鉢の位置については、東西方向の位置は古写真の分析結果を目安に据えていきたいと考えています。南北方向の位置については、合理的な納まりを考慮したいと考えます。そして遺構の保護です。遺構保護のため、保護層を確保したうえで遺構直上に復元的整備を行います。今、共有している画面で、ピンクの線が下のほうにあり、標高 12.9 とあります。ここが手水および礎石である蓋然性が高いと判断した石の上面です。碎石の上の部分から 670mm ほど確保できています。</p>
仲副座長	資料では、どこに記載されていますか。
事務局	資料では遺構面までは記入していません。画面の共有になっています。
事務局	<p>失礼しました。その他です。復元に用いる石材については、城内の保存石材の使用も検討していきます。燈籠です。古写真および古絵図から燈籠の大きさを推定し、四角型かつ生込型で宝珠のある燈籠とします。宝珠の形状は、古絵図等を引き続き検証して決定していきたいと考えています。位置に関しては、古写真を参考にして推定していきたいと考えています。</p> <p>説明は以上です。</p>
丸山座長	<p>それではご意見、ご質問をお願いします。先ほどの仲先生が言われたところで、覆土面は 12.9、もう一度ここだけ、先に説明してもらえますか。670mm という話が、碎石の上です。碎石は右の手水のところです。この線はあとで引いているので、発掘で出てきたところがどこのところからかを言ってもらったほうがいいと思う。わかりますか。深さ。</p>
事務局	土のところは 12.9 で、石の上面だと 1 番高いのが 13.12 です。

仲副座長	今の 12.9 は、何ですか。
事務局	今日の資料ではご提示していませんが、手水組跡の標高を示す時に 12.9 の近世面に据えられています。
高橋構成員	遺構検出面が、12.9 ですか。
事務局	はい、遺構検出面が 12.9 です。
丸山座長	この下は違うんですね。12.9 は、遺構検出の 1 番下端が、
事務局	近世面の上端が 12.9 で、石の立ち上がり分があるので、そこに据えられた石の天端の高さが 13.06 です。
事務局	すいません。画面共有の数字が違っていました。失礼しました。
丸山座長	ざっくり言うと、600mm くらい深くなるのですか。670 って書いてある、650。
事務局	13.8 を基準で考えれば、そうなります。700 弱、600。
丸山座長	近代遺構があるから、これ以上は浅くはできないです。
事務局	そうです。礎石よりも実際は、役石のほうが少し高いと思うので。もう少し薄いところもありますが、いずれにしても 600 前後は必要だと思います。
丸山座長	これは復元検討委員会の中で、もしあれば、追加で修正か何かしてもらったほうがいいかと思います。特に覆土はどれくらいとか。必ずしも、800 とかはいらないですけども、中には 5cm とかぎりぎりで行っているところもあるので。二之丸庭園では近代遺構があったから、それを保護する意味で。それがぎりぎり 50mm くらいあるかな。
事務局	近代遺構は 13.6 の天端に対して、200mm としてあります。
丸山座長	もっと少なくてもいいと思います。近代遺構は、100 で。もしそれによって、ここが下がるのであれば。
事務局	もし、それによって下がるかどうかですか。
丸山座長	それは、さっき高橋さんが言われたことです。
事務局	少し待ってください。建築の構造をしてみるのです。
事務局	68 ページに断面図を記載していますが。

丸山座長	13.60 が、1 番高いところです。
事務局	これは建築上の問題ですが、礎石の部分にあたるので、深さが深くて、これ以上上げるのが、なかなか難しいです。
丸山座長	建築との取り合いがあるので、建築で無理であれば仕方ないです。
事務局	純粋な保護層のみだったら、もっと薄くすることも可能かと思いますが、真上に柱が建ったりするものですから。
丸山座長	真上のところは、13.12 で 1 番高い。
事務局	見方によっていろいろ、ほかの柱とかもあるので。角の柱だけではなくて。具体的には、もう少し北の柱とか。
丸山座長	そうですね。それはいずれにしても、建築のほうとすり合わせてもらって。庭園のほうは低い方が、視点が低くなるので。
事務局	建築の視点としても低くしたくて、今、可能な限り下げている状態です。
丸山座長	それはまた、建築が、ここが目一杯で、こちらはそれに合わせることで。 一応今の覆土層の話は、これくらいで。次、ご質問等お願いしたいと思います。
栗野構成員	62 ページに発掘調査成果や、古写真、古絵図の検討から復元案を 62 ページで見えています。特に燈籠に関して、古写真では宝珠がないように見えます。前回、野村さんから、これは有楽型ではないかとお話がありました。今日、徳川園の参考事例で有楽型の燈籠を見せていただきましたけれども、有楽型には宝珠がないのが 1 つ。古写真が古絵図よりも優先するのであれば、宝珠のない四角型の燈籠なのかな、って思ったりもしました。 復元案では、生け込み型の燈籠になっていますが、もし生け込み型であれば竿の部分を深く地中に埋めることとなります。発掘調査で、そういった掘り方が見えるのかどうか。もし、ないのであれば、基壇基礎付の石燈籠を検討すべきではないかと思いました。古写真の解釈と、発掘調査試験で生込と推定した場合の掘り方が見えたのかどうか、ご説明をお願いできればと思います。
事務局	今確認しましたが、発掘調査結果としては、現時点ではわかりかねる状況です。 古写真については、笠形状がわかりづらいと思っています。宝珠がない、といい切っているのかどうか、わかりかねたものですから、宝珠の有無がわからない、笠の形状もはっきりしないという判断をさせていただきました。

	<p>次が、優先順位でいけば古絵図ですが。古絵図のほうでは。</p>
事務局	<p>補足をいたします。66ページをご覧ください。上のA'断面で、発掘調査から得られた煉瓦の基礎の位置が、それでよくわかるかと思えます。手水の南側はかなり、煉瓦基礎の設置に伴って乱されてしまっていますので、燈籠の掘り方の検出は難しいと思っています。</p> <p>それから栗野先生のご質問にありました、古写真の解釈です。解釈という言い方でいうと、私たちの解釈では、古写真でないことは確認できないと思っています。あるのか、ないのか、白く飛んでしまって、拡大しても飛んでいるので、あるのか、ないのかわからないというのが、私たちの解釈です。従って、優先順位としては次の絵図を見ると、2つの絵図とも明らかに宝珠が描いてあるので、こちらを採用したうえで、類例として挙げた有楽流の燈籠には確かに宝珠はないです。これは、野村先生にもお聞きしないといけないです。有楽燈籠に必ず宝珠がないわけではないと考えています。野村先生、どうですか。</p>
野村オブザーバー	<p>絵図しかないわけですし、どこまで信憑性があるかも、わかりません。ただいえるのは、類例というか、桂離宮の燈籠が、生け込みのもので今残っているのは宝珠が載っていないのが多いです。織部燈籠は宝珠があります。松琴亭の周辺にある燈籠は、石材の関係もあり、比較的風化しやすい石を使っています。実験的に、尼崎先生などが中心になっておやりになったと思いますが。水蛭燈籠が、本当に溶けて、石そのものが豊島石を使っていますので、復元してきちんとつくって、それがどう風化していくかを知る意味でも。上のほうを、宝珠の代わりに少しぼっちを付けています。</p> <p>この絵図を、どう解釈するかですが。ひょっとしたら、そのようなものがあつたかもしれない。宝珠をどんと、こういうふうに、今の図のように載せる形ではなくて、小さなぷくっと膨らんだコブがでているような感じ。そういうものが、しばしば見受けまますので。そういうタイプのもので、折衷案的なものになるかもしれませんが、そういうものはあり得るだろうと。今回のものは、形は若干違いますが、桂離宮の燈籠なども参考にされたらいいのではないかと思います。</p> <p>あと、栗野先生の基礎の部分の問題があります。生け込みの燈籠の場合、下のほうにぼんっと大きく、広く、安定感をもたせます。これは今でも、そういうやり方で作っています。こういう形で、安定感のあるものであれば、倒れる心配はないと思います。この断面形状で、いいかと思えます。なるべく下のほうは、安定感のあるように平たく作って、しっかり固めてやれば、この方法でも台石に載せる必要はないかと思えます。</p>
事務局	<p>今の先生のお話だと、宝珠については、写真には写り込まなくて、絵図にはぼこっと描いてあるので、折衷案としては、どうでしょうか。</p>
野村オブザーバー	<p>実際に図面を書かれたほうがいいと思います。そのときに、また検討されたらどうでしょうか。</p>

事務局	<p>因みに、笠が角形であるのも同様です。写真からは、丸か角かわからないと考えています。絵図には、はっきり斜めの線が描かれていて、四角く描かれているので、そういうふうにしています。考え方としては、同じです。徳川園の有楽燈籠は丸いので、同じです。</p> <p>大矢邸に残されていた、それは昭和の燈籠だと思います。それも丸形でした。絵図とは違うと思います。</p>
丸山座長	<p>いずれにしても、燈籠というか、石塔の専門家に、もちろん野村先生もそうですが、実際に作っている方に検討してもらえればと思います。それも含めて、後で提案させてもらいたと思います。もう少し、桂離宮のような事例と、実際に燈籠を制作している人の意見を聞いてもらったら、どうかと思います。日本全国、燈籠のために旅している人ですから。それはあとで、提案させてもらいます。</p>
丸山座長	<p>燈籠の件は、いろいろでしたが、まだ検討する余地が、庭園部会ではあります。今、室長が言われたように、論理的に順番に、重要度に従って。それと専門家のご意見を聞きながら、やったらどうかと思います。ほか、いかがでしょうか。</p>
野村オブザーバー	<p>手水鉢周辺のことですが。62 ページの平面図の部分と断面図の部分で、手水鉢の台座の石の関係が、だいぶ事実と違っているなどと思います。台石が、ほとんど手水鉢の大きさのひと回り大きなものの上に載っている人工的な形です。この平面のように、比較的天然の石を据えて、その上に置くのが、一般的ではないかと思います。こういう例は、あまり見たことがありません。</p> <p>もう 1 つは、台座そのものが円筒形の、いわゆる橋杭型といわれる燈籠などの場合、逆にまわりの役石よりも低く据えて、下からすっと立ち上がる感じの景色を作るのが一般的です。台を高くするのは、比較的高さのない、足りないものを立派に見せるために、下の台にも凝り、なおかつその上のほうに載せる感じが多いので、このありようは違うと思います。</p> <p>もう 1 つお話すると、この平面の左側のほうが、いわゆる三和土です。三和土で、ぐるっと、丸く、アールを作って囲っていますが、昔の古図を見ていると、多分このあたりが、寂しいと思ったんでしょう。小さな石を、ここに挟んでいます。景色で。それがきちんと図に描かれています。</p>
事務局	<p>袖垣の横ですね。</p>
野村オブザーバー	<p>それが景色として、補うように置いてあります。解体する中で、とんでしまう石ですが、実は、景色をこうやって見てみると、非常に寂しい景色になってしまいます。今の図の状態がそうです。そういうのを、きちんと加えないと、まずいだらうと思います。この絵図が、1つ下の景色の手がかりとして、1番重要な絵図だと思います。この絵図を参考にして作ったら、ほぼ昔のような状態が復元できるのではないかと思います。</p>

丸山座長	このへんは平面図を書いていただいて。かなり破損されているところですが。発掘の成果によって、割れていてよくわからないところがあれば、今いった石を挟み込むことは可能だけれども。それがないと、証拠がないのに、そこに置けないのではないかと、となるとどうしようもない。そのあたりどうですか。
野村オブザーバー	割れているところです。
事務局	58 ページをご覧ください。
丸山座長	景色をつくるのであれば、平面図を作るときに、現況に残っていた三和土の図を入れてもらって、その欠けているところがあれば、そこに石を挟み込むというか。絵図からそうしたことがわかる図を書いてもらおうと、いいですが。 どうですか。割れていますよね。
野村オブザーバー	1 個の石で、景色になっているかもしれません。
事務局	三和土片が、どこに付いていたかがわからないので、割れから、それを判断するのは難しいかと。
丸山座長	そうすると不明であると。少なくとも三和土で囲まれていたことが事実としてはあることを勘案して、絵図とあわせて、石をはさみ込む。 それともう一つ、最初に野村さんが言われた台石の件は、大矢家では手水鉢の下の低いところに石を据えています。この絵図だと上に、脇の役石と同じくらいの高さになっています。大矢家のものは多分、遺構だと思っています。
野村オブザーバー	そうだと思います。
事務局 室長	私も、そうだと思っています。今、マンションが建っているところまで探しに行きましたが、見つかっていません。 今度、風信を持っている大矢さんにお会いする機会がありましたら、お尋ねしてみようと思っています。
丸山座長	ぜひ、お願いします。
事務局	現存しているのならサイズを測らせてください、とお願いしたいです。
野村オブザーバー	最悪でも、写真があるだけでも貴重です。ある程度の復元ができると思います。
丸山座長	それと、気になっているのが、手水、水抜きです。水をどうやって抜くのか。ちよろちよろ流す分には影響ないです。他のところで大雨が降って、水が溜まってしまって抜けなくなってしまった例

	<p>が、結構あります。そのために、水琴窟が作られたと思っています。排水用です。このあたりの断面図、施工断面図みたいなのを、注意しないとイケないと思います。事務局から提案があれば。</p>
事務局	<p>今回は復元検討の段階なので、詳細設計の部分は入れていません。まず、発掘調査の結果から、海を中心に排水用の孔があったことは確認されています。それを根拠に、中央から排水するかたちにしたいと思います。その排出先が、座長が言われたように、海の下で、甕のような構造にして、一時的に溜めてどこかに逃がすやり方もあると思います。</p> <p>今考えているのは、建物の雨落ちのラインがすぐ横に来ています。その雨落ちは、おそらく玉石のようなものを使って、雨落ちを形成しようと計画しています。ただ、見えないところで、現代排水を入れて、それを北池にだそうと思っています。うまくつなげれば、海の排水も雨落ちの現代排水につなげることができれば、一番効率的ではないかと考えています。</p>
丸山座長	<p>ここは結構、落ち葉などが詰まるので、掃除のしやすいようにことを考えておかないとイケないな、と思います。これは詳細設計に近い内容です。</p>
事務局	<p>先生が言われるのは、飲み口の構造をどうするかで、変わってくると思いますので。そこは、少し考えさせてください。</p>
丸山座長	<p>例えば、海のところにごろたとか、その下に網をする</p>
事務局	<p>ほかにも網を置いて、見えないように隠してという事例はあると思いますので。</p>
丸山座長	<p>そのへんはまた、よろしくお願いします。</p>
高橋構成員	<p>58 ページで、赤い三和土と書いてあります。それが復元整備の中でも、赤く着色、赤漆喰仕上げ、赤く着色する、といろいろな書き方がされています。58 ページの右上の、当時の発掘調査の報告書だと、赤漆喰を上塗りとあります。そのへんの赤くしていった過程というか、工法の表現にばらつきがあるように感じました。そのあたりの造り方は、現状の遺物からはわかっているのでしょうか。</p>
事務局	<p>遺物を観察した結果だと、まず白漆喰でつくっていて、その上に赤い、ベンガラで着色しています。赤く表面的に塗っている。その赤い部分にだけ、小礫が混じっているということが観察できるので、白がベースにあって、その上に塗っているように見えます。</p>
高橋構成員	<p>赤漆喰は層として形成されていて、上から漆喰層として塗っている状況になっているということですね。わかりました。なんとなく白漆喰があって、上に赤漆喰が載っていることになるので、赤く着色するといったときの表現のばらつきも、もう少しそれにあわ</p>

	せて書かれたほうが良いと思いました。
丸山座長	赤を練り込んだ漆喰を、左官屋さんが形状を整えていると思います。そのような色漆喰を、左官屋さんは結構やっているのです、そういう表現に改めといてもらったほうが良いと思います。
事務局	表現上の統一ですよ。着色するというと、色を塗るように見えるので、そうではなくて、もう1層塗っているという表現で、きちんと統一することですね。
野村オブザーバー	ルネッサンスのときにやっている、塗り込むというか、染み込ませる工法とは違います。
丸山座長	かなり厚いところがあるので、乾かないうちに白漆喰を。
野村オブザーバー	イタリアの壁画は、だいたいそれで作っています。
丸山座長	フレスコ画とかね。フレスコ画は、壁です。
野村オブザーバー	それと同じように、半乾きのときに塗り込んでいくと、かなり密着しますから。ただ上に塗るだけだと、すぐ剥がれてしまいます。
事務局	工法的な判断は、その層だけ礫分の成分が違うので、別の層ではないかというのが今回の判断です。
丸山座長	もう少し詳細にやらないといけないです。工法がわかっていないところが、結構あるので。造るときには、左官屋さんのプロに聞いたらすぐわかります。
仲副座長	三和土のかけらがでていっているのですね。それは取りあげてあるのですか。
事務局	はい。
丸山座長	次回でも、部会のほうにもってきてもらったら。
仲副座長	以前、下の三和土の、園路のときも赤いのがありました。あれと同じ技法なのかどうか。
事務局	それは次のときに。
高橋構成員	もし層になっているのであれば、58ページの右下の図面にも、層として描かれていないと、つくっていく過程の根拠が見えにくいと思ったので。そのあたりを明瞭になるようにしてもらいたいと思います。
仲副座長	58ページの手水鉢の遺構写真のトレースがあります。実測図を

	示すものは、ないのですか。68 ページに示されているのが、当時の実測図ですか。
事務局	そうです。
仲副座長	これでいいのですね。これを並べておいてくれると、検討しやすかったなということです。 それで、読み取りのほうですが。類例も調査していただいています。先ほど野村先生も言われたように、縁先手水鉢になります。蹲踞とは違うので。縁先手水鉢の場合は鉢前構成になっていますので、鉢前構成という専門用語を使ってもいいと思います。鉢前構成の検討、ということで。すぐさま塾石、水汲み石など役石の名称をあてていますが、これは大丈夫ですか。
野村オブザーバー	それがそのままそうかどうかは。
仲副座長	推定ですよ。役石と、塾石に相当するとか。水汲み石に相当するとか。清浄石があるかどうかは、わかりません。鉢前構成が、いつ定型化したかは、議論のあるところで、微妙なところ。このあたりに、できるか、できないかというところ。定型化している役石の配置からすると、さっき野村先生が言われた手水鉢の台石がありますが、役石がもう 1 個あります。水揚石があります。
野村オブザーバー	その可能性があります。
仲副座長	台石の後ろに、面の平らな、
野村オブザーバー	平坦なもので、桶でここから水を水鉢に入れるというものです。
仲副座長	切れないのですよね。茶会の前に。それに相当すると。別々の石だったのか、1 石で 2 段になっている石を使っているのか、というところもあると思います。別かもしれませんが。 そうなってくると、前回の部会の際に、この発掘のところで浮いている石が転がっていたというのがあって。それが関係するかどうかをご質問しました。場合によっては役石の、鉢前構成の石が外れて飛んだ可能性もあるので。その大きさなども教えていただければ、と思います。 もう 1 点いいですか
仲副座長	62 ページで平面図、立面図が書いてあります。これに、さらに何石か追加となっています。標高が細かく書かれています。遺構実測図、68 ページに実測のときの測定が載っていますが、これにそれぞれ盛土の高さを足した数値で書かれているのでしょうか。石の形や、点の位置がずれていたりするように思います。水汲み石といわれているところを見ると、遺構では 13.10 で、ここは 13.95 になっていますから、85 cm プラスです。ところが塾石といわれているところは、13.04 だと思います。それに 85 cm を足すと 13.89 に

	<p>なりますが、ここには 13.87 になっています。これの数字の差は、どうしてでているのですか。</p> <p>それから清浄石といわれているところは、実測図では 2 点取られていて、いずれも 13.02 で同じ高さですが、こちらを見ると高さが違います。稜線のところ 13.87 と 13.92 になっているから、斜めに据える設計になっています。さっきの話だと動いているということがないので、上に垂直移動させて据えるということでした。</p> <p>より詳しいデータがあるのか、どうか。</p>
丸山座長	<p>図面が小さいので、この重要なところは、もう少し大きく書いてもらって、標高など、発掘ででてきたものと、それを基にして仮に、左のほうに発掘ででてきたもの、右のほうに、それを基にして嵩上げてつくる図面をもらったほうがわかりやすい。発掘の成果がだぶって書かれているからゆえに、わかりにくいので。</p>
仲副座長	<p>それにあわせて、さっき座長が言われたように設計の中で、遺構をそのまま再現、復元する形でやる範囲と、やや想定して復元した範囲で薄く色分けしておく、という根拠でどこを崩したかも、わかりやすいのではないのでしょうか。</p>
丸山座長	<p>判定できた図面を置いておいて、それに嵩上げたときの図面を、でてきた石についてはそのまま置けるものは置いてもらって、先ほど 1 つ石があるのではないかなというところは想定して。いずれにしても、発掘したものと設計した図面が混ざっているので、読み取りにくいです。標高も含めて、石の高さも。ここは余芳の建物が中心になりますが、庭園のほうはもう少し詳細なポイント、先ほどいった材料の話もあるますし、お願いしたいと思います。</p> <p>他は、いかがですか。平澤さん、どうですか。</p>
平澤オブザーバー	<p>今、いただいた意見なども含めて、資料構成も含め全部通しでお話します。</p> <p>58 ページの枠組みにある発掘調査結果は、ページを変えてほしいです。先ほど、仲先生からご指摘がありましたが、実測図を必ず載せてください。燈籠の位置も含めた、燈籠を建てようとするところも含めた遺構図を書けば、先ほど栗野さんが言っていたことも一発でわかります。</p> <p>58 ページの手水の遺構写真は、スタッフが置いていない写真にしてください。</p> <p>文章が結構長いので、所見のまとめのところを枠囲いにするなどして区別してください。</p> <p>石材の現物が地表にでていないので、確認できないと思います。そうであれば、施工時に再発掘して、詳しく石材を確認する必要があると思います。そういうことも含めて、発掘調査結果は別のページに組み直してください。遺構図が、これでは入らないので。</p> <p>59 ページの古写真や古絵図にも所見のまとめを、検討の結果それぞれどういう情報を得たのか、58 ページの最後の石の所見のよ</p>

	<p>うに載せてください。</p> <p>野村さんが言われた、御城御庭絵図のところに添えてある石などが見られるとかいうことも、59 ページの古絵図の所見に出てくると思っています。写真については、こういう情報が読み取れると書いてありますが、古絵図の方はまとめがなくて、全体的に書いてあるので、そこを直してください。</p> <p>60 ページに、参考事例と類例を挙げています。これも類例として挙げている考え方が、有楽流を前提とした例で、古写真等から確認されている円筒型の手水鉢で、なぜ、その類例が検討に値するのかが、今一よくわかりません。また、画面では直していましたが、右ページは割付をやり直してください。</p> <p>61 ページの手水鉢についても、なぜこういう事例が検討、比較するのに的確なのか書いていないので、わかりません。</p> <p>62 ページ役石の復元的整備の考え方については、大枠はいいと思います。役石について、3 石と可能な限り同形状、同石質の石材を据えることにするのはほとんど不可能だと思います。同じ形の石は絶対見つかるわけがなく、何をやろうとしているのかわかりません。</p> <p>62 ページの右図は、方向が違うので必ず同方向の図面にしてください。上図を半時計まわりに、90° まわすしかないと思います。</p> <p>遺構との高さ関係の話がでていましたが、相当する遺構図をその下にきちんと書けばその距離はわかります。後ででてくる最後の図も同じです。整備図の断面には遺構図が下に書いてありますが、遺構図があって、その上にどのくらいのかたちで、どうするのが一発でわかる図面にしてください。</p> <p>一番大きいのは、62 ページの 3 石と可能な限り同形状、同石質の石材を据えることとするのは一体何ができるのか、これではわからないので。そこのところは丁寧に書いて、どうするのかは、あらかじめご議論していただいた方がいいと思います。</p>
丸山座長	<p>たくさん宿題をいただきました。同じようなのは無理です。確認できる役石を、ここの手水に再現することになります。やり方として、やろうと思ったら型をとって、という話もあります。そこまでやらなくても。ここの手水の重要なところは、据え方もあります。赤いベンガラでやっていることが、最大のここのポイントだと思います。</p> <p>それと、縁先手水にしておいたほうがいいです。普通の茶席ではないですから。縁先にしておいてもらったほうが、いいと思います。ここで抹茶などをやっていることは、ないです。ここでお茶を一服するくらいなので、あまり正式なものではないです。</p>
平澤オブザーバー	<p>62 ページの生け込みの燈籠ですが、宝珠が大きすぎて史料と違うと感じます。野村さんのご指摘にもありましたが、絵図に描いてあるものとか写真とか。58 ページの最初のところに写真を繰り返し載せていますが、他のページを見るのは難しいのでもう 1 度写真を載せてほしいです。</p> <p>59 ページのトレース図は写真であまり見えないからわからず、絵図で見てもこのような大きいのは載っていないです。宝珠は別</p>

	<p>に作って、ほぞを差し込んでいるものではなくて、一体的に作っていることもあり得るわけです。例えば、60 ページの六角形の笠も、どれだとなかなか言えないです。写真下段も左から 2 番目みたいな作り込みもあり得るわけです。62 ページのぽんと載っているものは、根拠としている史料との突き合わせで見ると、違和感があると思います。</p>
丸山座長	<p>ここは今後、実施設計などいろいろなところで何回もでてくる場所だと思います。</p>
仲副座長	<p>燈籠だけいいですか。ずっと悩んでいました。絵図にはなくて、遺構でも燈籠があったことが確認できないのを、移築前の現在のところにある写真を基に復元するのは、この事業の考え方として、筋が通るのかどうかということを気にしています。</p>
丸山座長	<p>それは、絵図にでてくるから、燈籠については、石造品を置くというのは原則ですよ。</p>
仲副座長	<p>どの絵図ですか。</p>
丸山座長	<p>御城御庭絵図。それです。</p>
仲副座長	<p>それなら結構です。</p>
丸山座長	<p>この絵図には、でてくるものが、おかしいところもあります。例えば木橋です。そこには 6 つ礎石がでていますが、発掘でてきたのは 4 つです。でも木橋であったといことは、確かです。だから 6 つにするのではなくて、発掘の成果と絵図を組み合わせで復元する。ここでも、位置がどうのこうのという話は出てきますが、その位置はある程度現場で判断せざるを得ないです。</p>
仲副座長	<p>立面だから、近く見えているだけです。</p>
事務局	<p>古写真解析だと、今くらいの位置にでてきます。少し絵図とは乖離していますが、要素としては確実にありました。</p>
仲副座長	<p>移築したときに、このように距離がとれないので、寄せて据えたのかな、と思いました。</p>
丸山座長	<p>それは慶勝の写真なので、二之丸庭園にあったものです。</p>
仲副座長	<p>そういうことですね。解析すると、この位置になるということですね。</p>
丸山座長	<p>それはあくまでも写真資料だから、現場で痕跡がないです。</p>
丸山座長	<p>手水はコレクションする人もいますから。造園屋さんが持って</p>

	<p>いるわけではなくて、頼まれています。例えば、手水を集めている、手水を買って、そこに持っていきます。それはよくあるパターンで。買い戻すのは大変なことだから、さっき言われたようにサイズを測ってやるということで、対応してもらったらどうですか。</p> <p>いずれにせよ、平澤調査官からいろいろリクエストがでたので、それを修正してもらって、また検討したいと思います。</p>
平澤オブザーバー	<p>補足です。絵図の性格について、御城御庭絵図と尾二之丸御庭之図について書いてありますが、事業を進めていく中でもっと精度を上げないといけないと思います。基本的には御城御庭絵図を清書版と考えているので、どういう情報を持っているのか、どういう点で信頼できて、どういう点で信頼できないのか。</p> <p>質的な情報については実態を反映しているのではないかと。ところが量的な、距離や石の数などについては、信頼できる部分とできない部分がある。</p> <p>全体の整備が20年くらいかかるのか、わかりませんが、その間にも研究を進めていく必要があると思います。いつまでも漠然としているわけにはいかないのです。それは鋭意、この整備事業はこれからも進んでいくわけですから、きちんと取り組み絵図に含まれている情報、絵図から抽出できる情報の精度を上げていかないといけないと思います。今の時点では漠然と、質的に情報はある程度信用できるけれども、量的なものはそんなに信用できない部分もある。精密に検討ができると思うので継続していただきたい。</p>
丸山座長	<p>発掘成果と、絵図を見ながらやっていると、信頼できるものと信頼できないものがあります。飛石などは、一応ふってはありますが、数は信用できないので、それは現場で調整しないと仕方がないです。今後、前から言っているように、築山をたくさん造らないといけないですが、削平されていて、現場にはなにもない。これしかないのです。これを根拠につくっていかなければいけないです。ある程度これの、限界もありますが、絵図を利用せざるを得ないことは、我々の課題でもあります。</p>
平澤オブザーバー	<p>絵図との関係で、最後の82ページに東側になんとなく大きい石などを、絵図にならって配石していますけど、今回、ここまでやるのかどうか、配石するとなれば、石を選ばないといけないので簡単ではないです。多分春日燈籠の前とかになります取り扱いについて庭園部会で議論していただく必要があると思います。</p>
丸山座長	<p>踏み分け石のところなどを見ると怪しいので。燈籠内は、もう少し大きな石が並ばないといけないと思います。イメージだから、これでいい感じもしますけれども、言われるように、これが再現されると、あくまでもイメージです。軒の下は、ずっと瓦でやるのかどうか、わかりません。</p>
事務局	<p>ここは玉石かなと、さっきお話したところです。瓦ではないと思います。</p>

丸山座長	<p>この辺は、まだ決まっていないです。絵からいうと、手水が少し高すぎるのか、濡縁のところとの関係が、これでうまくいくのかどうか、気になるところです。言いだしたら切りがないので。イメージと言われれば、そうですか、と言うしかありません。もちろんイメージが先行してできていく可能性があるのですが、危険ではありますけれども。とりあえず、よくスケッチを出すようにという委員もおられるので、しょうがないと思います。</p> <p>では、資料（２）令和４年度の二之丸庭園の修復整備について、お願いします。</p>
	(2) 令和４年度の二之丸庭園の修復整備について
事務局	<p>まず資料２-１、二之丸庭園の保存整備のスケジュールをご覧ください。庭園の修復整備工事については、余芳移築再建工事との工程等の調整が必要となります。令和４年度については、この表の一番下で赤くお示しした部分がスケジュールになります。北園池の護岸の傾倒箇所やひび割れの調査、こちらが資料２-２と資料２-３になります。こちらの調査とともに工事施工上、余芳の現地組み立て前に行う必要がある、北側の石組等の整備に取り組みたいと考えています。北側石組等が、資料２-４になります。</p> <p>資料２-２をご覧ください。護岸傾倒箇所に係る調査の方針です。目的です。傾倒の主原因を特定すること。主原因をもとに、修復方法を検討するためです。調査箇所は、下の図の赤い丸部分と、右の上の図の赤い矢印でお示しした範囲です。調査の方法です。学芸員が立ち会いのうえで、右の図の①と②番を人力で取り外し、背面の樹木根や堆積土の状況を調べます。その結果必要であれば、さらに下の③番についても、人力で取り外して調べていきます。護岸の構成材料については、これまでの分析結果を整理し、必要に応じて、この箇所から試料を採取し分析します。調査の後の措置です。遺構の保存に影響を及ぼさない範囲において、傾倒の主原因を極力取り除ける措置、今は主原因、想定で樹木根の撤去などがありますが、こちらを施したいと考えます。主原因を撤去した後は、土砂の充填が必要になるときには、山砂で充填したいと考えています。この措置について、掘削を伴う場合、右の図の青い点線のところ、約 3 m²を範囲とした人力による掘削とします。近世遺構面までを原則としたいと考えます。面積は最小限とします。調査に伴って発生した背面土砂は、埋め戻しのため保存していきます。調査箇所については、崩壊しないように土嚢などで抑えるとともに、外した構造物の破損等を防ぐために、シート等で養生したいと考えます。調査後、傾倒した護岸の修理方法および修理材料を検討して、有識者会議の意見もふまえて、工事に着手したいと考えます。</p> <p>資料２-３をご覧ください。北園池護岸のひび割れ修理の方針です。箇所の選定です。先生方の立ち会いのうえで、護岸のひび割れの発生状況を確認し、右の図の緑色で示した範囲から、修理が必要な箇所を選定していきます。修理の方法です。定めた対象箇所の苔や汚れなどを清掃後、次に述べる材料を充填していきます。修理材料です。材料の配合については、ひび割れの箇所や幅などを勘案した区分ごとのサンプル、主な材料としては砂、細礫、消石灰、にが</p>

	<p>りを想定し、自然科学分析の結果をふまえて作成していきます。これまでには、池底、護岸、護岸上部において薄片の偏光顕微鏡観察、同薄片切断面の元素マッピング分析、X線解析分析により、骨材の概略の粒度組成や岩石の種類、カルシウム量の分析を行っています。令和4年度以降も引き続き予定し、実施していきたいと考えています。</p>
丸山座長	<p>前半部分ですが、工程表も載っていますが、ご質問、ご意見等をお願いします。</p> <p>1点だけ先に。資料2-2の、調査後の措置です。この書き方だと、近世遺構面までを原則とする、という言い方があります。あそこは、近世の造成が遺っているので、こういう表現ではなくて、三和土下部までを原則とする、として下さい。</p>
事務局	<p>わかりました。</p>
丸山座長	<p>倒れてきているから、そこまで全部掘らないといけない、ということを書いてもらったほうがいいかと思います。</p> <p>資料2-3のところで、修理材料のところで書いてある、砂利が入っています。小砂利が。砂利の径や、川砂利か何か、川砂利という気はしています。そういうのも入れておいてもらった。細礫と書いてあるが、礫か、砂利か、わからないです。骨材の概略などを調べると、どういのが混ざっているのか、わかるかと思います。修理箇所、同じ資料2-3の下です。これは漆喰のところだけやったらいいが、擬岩が上にあります。擬岩はどうするのかと。</p>
事務局	<p>擬岩は今後、ご相談をさせていただきたいと思っています。</p>
丸山座長	<p>今日は、そこは触らないのですね。</p>
事務局	<p>擬岩は、資料2-1のスケジュールで、R6年度で想定しています。天端、擬岩破損箇所、池底修理はR6で。先に、R4から取り組むのは、ひび割れや傾倒で工法を考えていくことと思っています。</p>
丸山座長	<p>池底の修理は、ひよっとしたら倒れている擁壁と一体的にやらないといけない場所もあるかと思います。側だけ直して、一体的に造られていると思うので。池底修理を、もう少しR4のところに調査と、全部はできなくてもいいので。傷んでいるところは、ここにまわさないといけないかと思います。池底修理がR6になっているけれども、R4にひび割れの調査や傾倒箇所を調査します時に、池底の調査も一部入ってくるし、修理も入ってくるのではないかと。</p>
事務局	<p>一体構造ではないかという時に、必要になるので、括弧書きないし※印か何かで、必要に応じ池底を、という形で。</p>
丸山座長	<p>調査するにしたがって、側面だけではなくて、下も一緒にやらないといけないことが出てくる可能性が多いかと思います。今、水で抜</p>

	<p>けています。だんだん底が、粒子の細かいのが外に出ていって、かなり危ない状況になっているのではと思います。この前も言いましたけれども、倒れている、あるいはかなり被害が多いところは、下と一緒に調査しないといけないのではないかと思います。</p>
事務局	<p>それは、そのとおりだと思います。護岸の修理にともなって、護岸と一体に直していかないといけない部分は、言われるとおりの早い段階から調査に含むべきだと想っています。R6 で池底修理は、もっと大穴があいているところ。あそこは、最後に埋めようと思っているので。護岸が全部直し終わってから埋めないと、水が溜まってきてしまいますので。雨が降ったら、水が溜まってきてしまいますのでここに書いてあります。R4 の調査に、護岸に付随する池底も含むのは、それはそのとおりだと思います。</p>
丸山座長	<p>それなら結構です。</p>
事務局	<p>最初に言われた、近世遺構面までというところですか。言われるとおりの、近世だ、近代だという言い方は、適切でないと思います。ただ、表現上のどこまで掘るかについては、少し考えさせてください。</p>
丸山座長	<p>例えば、外した裏側を、構造調査をしなければいけないわけだから。裏側は近世ですよ。</p>
事務局	<p>近世です。この表現は違うと思いますので。別の表現に改めます。表現の仕方をどうするのかは、さっき先生がいわれたすごく深いところまでというのは、それはそれで現状変更上問題がありそうなので。</p>
丸山座長	<p>外したときに直すのだから、その情報を得ないといけないから。</p>
事務局	<p>必要最小限のところは、わかります。表現は、考古の学芸員と相談します。</p>
事務局	<p>趣旨としては、これによって新たに近世の面を大きく破損するということではなくて、修復のためということを書こうと思いましたが、先生が言われるように、そこがすでに近世なのだから、ということなので、それが適切に表現されるように、検討します。</p>
丸山座長	<p>修復の工法や、やり方は、ここは唯一無二なので。ほかの座長は、他の事例はないと言われるが、ないです。ここが唯一無二だから、その工法を、現在破損しているところから学習しないとけない。</p>
事務局	<p>やる以上は、そこでの情報をとらなければいけないと、理解しています。</p>

丸山座長	表現はおまかせします。
平澤オブザーバー	資料 2 - 2 です。「近世遺構面までは人力による掘削とする」としておいて、必要最小限の範囲でやればいいと思います。 一番下を書いてある「有識者会議」は、別に有識者会議があるみたいに見えるので、「庭園部会」などきちんと記してください。 資料 2 - 3 で、実際に施工する材料の配合について「自然科学分析の結果をふまえて作成する」と書いてありますが、分析結果をふまえたといっただけで確認ができていないままやったら困るので、適当なのかどうか庭園部会で確認する機会が必要。自然分析結果を部会に提示し施工材料を確認してください。
事務局	当然サンプルを作りますので、案とでき上がったサンプルは、当然先生方に見ていただきたいと思っています。
平澤オブザーバー	そのサンプルが分析結果と照合できる形で説明されないといけないことを指摘しました。
丸山座長	権現山の上の三和土も、1 回サンプルを作ってもらいました。それで、配合をこれにしよう、というのは庭園部会で了解していただいて施工してもらいました。今、少し挙げている、ああいうサンプル作りというか、工法も含めてやっていかないとはいけないと思いました。
事務局	そのようにいたします。
平澤オブザーバー	繰り返しますけれども、自然科学分析の結果と、実際の施工材料の照合について、庭園部会で確認してください。
事務局	平澤主任、先ほど有識者会議と書きましたのが、うちの会議の構造上、全体整備検討会議と庭園部会の両方に諮らないといけないので、まとめて有識者会議という表現を使わせていただきました。
平澤オブザーバー	それでしたら名前を 2 つ書くべきだと思います。
事務局	そういたします。
丸山座長	そうしたら、最後の説明をお願いします。
事務局	資料 2 - 4 をご覧ください。4. 石組の復元的整備です。御城御庭絵図などの絵図や周辺との取り合わせから、以下のように整備を計画します。画面共有しているのは、今回整備を考えている場所をピックアップした、御城御庭絵図と尾二ノ丸御庭之図です。配布はしていません。画面共有だけです。こちらから以下のように、整備を計画していきます。施工については、現存する石組を参考にします。使用する石材については、基本的に城内で保管されているものを考えたいと思っています。

	<p>具体的には、資料をご覧ください。余芳をこのへんに再建しますが、その東側、池の北側があります。場所としては、このあたりです。この石と、この石が、今図のところに、こちらと、平面図ではこの位置に相当します。その間をつなぐかたちです。下が断面図で、A-A' と B-B' の断面構成を描いています。青色が計画の部分で、ピンク色の部分が遺構の部分になります。</p> <p>説明としては以上です。</p>
丸山座長	<p>これは、池より上の部分の石組ですが、これだけ大きい石が確保どうかというのは、非常に危惧されているところです。いかがでしょうか。ご意見等。</p>
栗野構成員	<p>質問してもいいですか。今見せていただいている図面で、何かの間違いだと思います。遺構面などの下に、紫色か青色の大きな石が潜り込んでいるように見えます。それが何かの間違いで、正してもらいたいです。</p> <p>ここは、おそらく土ぎめで景石を施工されるにしても、800kg や 1t 以上の土を土ぎめするとなると、どうしても遺構面より下に、現場で施工するときは、少しずつ土を削りながら石を 1 回仮詰めしてはもう 1 回突き棒などで突きまくって。遺構面より石が上面だったとしても、施工過程でどうしても遺構面を傷めるというのは、私だったら起こりそうな懸念があります。そのあたりを、教えていただけたらと思っています。</p>
丸山座長	<p>遺構面よりか、ここは掘り込むことは難しいので、施工についてはかなり慎重にしないとイケないです。それと、介石などが全然描かれていなくて心配です。遺構面を、どう保護しながら、組んでいくかは、この大きなテーマです。それから大きな石。今 1t と言われたが、そのような大きさではないです。5t、10t など、それくらい大きい石が想定されているのですよね。その石が、あるかどうかという話です。見つけておかなければいけないです。</p>
事務局	<p>B-B' 断面と書いてある立面図で見ると、遺構面の下に潜りこんでしまっているように、見えないこともないので、勘違いしないように直したいと思います。実際は、この図面でいう、奥のほうに向かって遺構面が上がっています。すべて、遺構面だけではないですが、すべてが法面で上がっていつています。実際は横の A-A' 断面のように、遺構面とともに石も上がっていくので、潜り込むことはないと考えています。</p> <p>それから丸山座長が言われた、石の重さです。簡単な計算で、石の 9 番と 5 番の 2 つが、ここに書いてあるサイズからいくと、10t クラスの石になるかなと思います。そのほかの石は、数 t サイズの石かと思っています。</p>

丸山座長	<p>この目的は、トン土嚢のものがずっと並んでいて、池とは分けて石組ができるということが前提ですよ。</p> <p>本当は下から積み上げていったほうが楽ですけども。予算など、いろいろなことがあって。</p>
事務局	<p>ここは岩組みの前に、将来的に通路も付いてきます。護岸からはだいぶセットバックした位置になってきます。施工の都合もありますが、大きい石を入れていく都合で、この段階で先行してここは、施工していきたいと考えています。</p>
丸山座長	<p>1つは、余芳の復元のときに、大きなクレーンを持ってくる。大きな石を早めに据えたいというのが、1つの理由かと思っています。</p>
栗野構成員	<p>ここって、ラフタークレーンなどが入る場所ですよ。</p>
丸山座長	<p>今なら入ります。</p>
栗野構成員	<p>わかりました。</p>
丸山座長	<p>問題は、余芳が復元で建ってくると、覆い家もありますが、クレーンが自由に入れなくなる。それが心配なので、大きな石はこの時点で入れておかなければいけないというのがあります。</p> <p>栗野さんが心配されているように、ここは発掘の遺構面より上にしないといけないですが、覆土がそんなにできないと思います。覆土をしながら、介石、根石を入れて置いていかなければいけない。そのまま、ドンと置くわけにはいけないと思います。かなり下を叩きこんだりして。大変なところですが、これを見ると、少し怪しいなと思います。図面とすれば、復元、ピンクのところは平面図でも描いてあるけれども。ピンクの石があって、横に、斜め下に今度の計画のものがあります。これの取り合いは怪しくて、あたるのではないかと、という気がします。そのあたりが、どこまで図面で表されているのかどうかというのは、心配です。</p>
仲副座長	<p>これ遺構ですよ。</p>
丸山座長	<p>遺構とはいっても、土盛りはしています。写真のトン土嚢のところは置いてあるけれども、トン土嚢から下は10cmもない。そこは遺構です。</p> <p>これも材料を先に。野村先生、なかなかこのような大きい石ないですよ、今。</p>
野村オブザーバー	<p>ないですが、大きすぎはしませんか。印象として、だいぶ違う、これは。滝組ところでも、大きいことは大きいですが、重さというか、何かずしんと重い感じで。だいぶ雰囲気が違うな、っていう感じですよ。</p>

丸山座長	事務局やコンサルの話では、大きさについては周囲のところがあわせてやってきたということです。
野村オブザーバー	例えば、燈籠とのバランスからしても、お山のてっぺんにどんと置いてあって。
丸山座長	この燈籠は、外してもらいたいなと思っています。
野村オブザーバー	そうですが、実際にあったと思います。燈籠の形は、桂離宮の燈籠の少し小さめの燈籠ですね。これ。燈籠そのものは、もう少し大きい燈籠のようです。普通、雪見型の燈籠は、水辺に置くというのがセオリーとしてあります。それだけではなくて、例えば山燈籠といって、修学院離宮の場合は、上のほうに、このように凧のような感じの燈籠が建っています。そっちのほうに、どっちかというに近い感じ。同じようなものが、揚輝荘にもあります。そういうのからすれば、こういうのもあるのでしょうか、
丸山座長	燈籠が小さいです。もっと大きいはずです。
野村オブザーバー	そのとおり、燈籠と石との関係が、どうもおかしい。全体で考えなければいけないので。 この絵を見ていると、周りに植栽が、手前にもあって。そういう中に入れる、林というか、山の中にあるような雰囲気なので。それが、この石組の中で表現できなければ、これは違う感じになります。なんか重々しく、圧迫感があるような気がするの。
丸山座長	これはあくまでも、発注用の図面とを考えてください。実際には、大きい石を、かなり大きい石を据えないといけない。これはまた野村さんにも手伝っていただきながら、据えていこうと思っています。量的なものです。何t級が、どれくらいいるのかという話をやっていかないと、進まないです。 燈籠は、小さすぎると。大名庭園で、このような大きさではなくて、これの3倍くらいやらないと、迫力がない。これは、個人庭園とかですから。燈籠は別途考えてもらった方がいいです。本当は、外してもらったほうが良いと思います。どこでもそうですが、大名庭園は、どこでも大きい。なんでもです。踏分石でも、畳1畳など使っていて、燈籠がこのように小さいわけがないです。どうしてやるかという、どや顔です。俺のところはどうだ、という感じでやっている発想なので。どこでも燈籠は非常に大きいです。
野村オブザーバー	この場合は、燈籠が描かれているので。1つ石のボリュームを知るうえでの参考にもなるだろうと思います。最終的には、このような感じの雰囲気にしないとイケないです。そうすると、そこにもってくる燈籠が、参考の図として描かれていますが、桂離宮の燈籠です。これは、雪見燈籠として、比較的小さい燈籠です。これが、ここに置いてある燈籠とは、まったく違うものが置かれています。これは、絵としての参考にもなりません

丸山座長	笠が3倍くらいです。
野村オブザーバー	これに近いものを置いてみる。最も古いものの1つでいえば、先ほど度々でてきた弧篷庵の燈籠が、雪見燈籠としては一回りも、二回りも大きいです。そのような燈籠を、ここに置いて、どのような感じに造ったらいいのか。そうすると石ももう少し小さく見えるかもしれませんが、今の、このようなバランスはあり得ないです。
事務局	石のサイズでも、横は、今お話しを伺って考えていきます。高さのほうは、斜面の角度が結構切り立っているので、この絵くらいのもがないと、土留めというか、土押えとしてこれくらいの高さが必要と思います。
野村オブザーバー	ただ上のほうが、こういうふうに入れる、高さを稼がないといけないのか。すっと下りてきてのところなのか。その下段にあわせるような感じに、ぎりぎりにやっている感じがありますので。
丸山座長	道際に建っているよね。
野村オブザーバー	そうすると、これくらいの高さになってしまうのでしょうか。そんなにめちゃくちゃこだわっていないのではないかな。法面にあわせて、ずっとやっていけばいいわけで。
丸山座長	これだと逆に道際に大きいのが建っています。もっと道際に大きいものをやって、奥にそれより小ぶりのものをもってくる、という感じはありますが、この絵を見ると、手前がものすごい大きいです。
事務局	一番大きいのが5番です。これで言っているところの。池の中にある飛石を渡ったところにある大きいのが、5番です。5番の背後にある、大きい雪見燈籠が載っているのが9番です。
丸山座長	でも、この絵からすると、5番のほうが大きい感じがする。迫力があって。渡って来たときに、正面に座っているのが一番大きいのではないですか。その後ろに、もちろんあるけれども。何はともあれ、このような石があるかどうかです。10tなら10tでもいいです。7tくらいでもいいです。
事務局	ここに書いてある数字で計算するとです。
丸山座長	大きい石をいかに集めるか。大きい石って、ここも大きいです。園路に置ける大きい石が、数個いるわけです。
事務局	ここを使うと3ついると思います。
丸山座長	最低3つだけでも、もっとあってもいいと思います。早く石

	<p>を確保できることを考えないと。碎石になりそうなところが、いっぱいあるので。</p> <p>それと、園内からもってくるのは、史跡で指定されているところからは、持って来られないです。その方法があるのですか。それを調べてほしいです。もし、その方法があるのであれば、どこの石ならもってこられるのか。</p>
平澤オブザーバー	<p>場内っていつているのは、城の中という意味ですか。</p>
事務局	<p>城内各所に、以前出土したものや、どこからかある時期に運ばれてきたものなど、集積されているものがあるので。</p>
丸山座長	<p>西の方の奥にありますよね。</p>
事務局	<p>そのあたりとか。堀の中にも、何か所かかためてあって。石材バンクを作るべきとのご指摘を受けたので、今職員が、城内にどの石がどれだけあるのか、調査をしています。それは、最終的に整理をしたところで、候補を検討していくことになるのかと思います。</p>
平澤オブザーバー	<p>どっちにしても、場内といつているのが、どの範囲かよくわからないのでそのように書いてください。</p> <p>権現山東側の削平されたところを造成するとき下の石までやりますと言われたが、据えるには石を選ばないといけないのだから止めた経緯があります。</p> <p>資料2-4も根拠を示さずに9石描いてあり、これはどこからどういう根拠で配石したのか説明がないです。見た目で、結構大きいのではないかなど、印象で議論してもしょうがないです。</p> <p>余芳東側の石を据えるのかということとも関係します。</p>
丸山座長	<p>この絵で、沢飛石渡って、園路があって、すぐでしょ。これの前は、池です。池護岸として、ここに密接に関わってくると思っています。余芳の関係があるので、進めないといけませんが。前から言っているように、ここの工法です。三和土の工法をどうしていくか、というのを並行して、石はぎりぎりセーフという気はします。工法について庭園部会で、本当に唯一無二の護岸の工法を検討しないとイケないです。それにあたって、部会だけでは時間が足りないと思います。今、事務局がやってもらうことになっている発掘の成果をふまえて、いろいろな人に来ていただいて検討したいと思っています。石の組み方は、これまで経験があるが、護岸については、誰も経験していません。そういうチームというか、委員会ではなくて、実働部隊で検討してもらいたいなと思っています。その中には、職人さん、石組ができる人です。それと三和土ですから、左官屋さんが必要です。この辺で一番重要なのは、左官屋さんが一番重要です。それをバックアップするような、先ほど平澤さんが言われたように、科学的な根拠に基づいて、いろいろ三和土をやっていく。あるいは、事前に、パイロット的につくってみないといけません。それと燈籠です。燈籠は、燈籠の専門家に来ていただい</p>

	<p>て、いろいろ議論して、職人さんのレベルで、我々もそれに加わってやっていったほうが、ここを今後ずっとやっていくうえでは重要と思います。人材については、また相談させてもらいたいと思います。左官屋さんについては、名古屋城での実績のある方に一度見てもらっています。そういうところの知見も、いろいろ教えてもらっていますので、お願いしたいなと思っています。</p> <p>ぜひ、事務局で検討してもらって。今後長くかかると思いますが、まず、工法です。どうやったらここを復元できるのか。普通の日本庭園だと、植木屋さんで石をもっていったり。これは、その下に三和土があるので。そのあたりの知見を、我々も共有しないといけないです。ぜひ、お願いしたいと思います。</p> <p>資料2については、いかがですか。</p>
平澤オブザーバー	<p>絵図での距離関係は実測図ではないから全然合わないですが、相対的な位置はある程度信じてもいいのではないかと、という話があります。</p> <p>9石描いてある石を、絵図を基にということをとるのであれば、1から9まで振られている石と、絵図に描かれているそれぞれのもので対照できないといけません。それは、さっき言った自然科学分析をきちんと確認されないまま材料を決めてしまうのと同じです。</p> <p>絵図を参考にしました、と言っているが、資料2-4の絵を見て、どれがどうなっているのか分からないです。</p> <p>例えば、雪見燈籠の右側の大きい杉はどうするのか、桜はどうするのかなど、植栽と一緒に考えないと施工できないと思います。</p> <p>今回は遺構が全部失われている所だから、元々の遺構が全く確認できないわけです。今回やるのが、今後の全園の配石や植栽などの標準を示すことになるのですから、しっかりとした検討が必要です。工事上の都合は分かりますが、そうであればなおのこと、今後の配石をどうするのか考えないとといけません。</p> <p>失われた配石をどうするのかは話をしていないし、この間の余芳まわりの発掘調査結果には、絵図に描いていないが明らかに元からあったとしか思えない大きい石があります。ああいうものと、発掘で出てくる元々の地盤と、絵図との照合ができない点について、どうするのかをきちんと考えないといけません。</p>
丸山座長	<p>ここの絵図で抜けているのは、飛石に、沢飛びがあって、渡ったときに、もっと大きな石をもっと据えている。それは非常に特徴的です。絵図の中で、どういう見方をさせるのかというのはあると思うので。もう少し広い範囲で、飛石で正面に大きな石がきているなど。それを中心に、その脇に続いています。基本的には、絵図から読み取れる部分は、そうとは思っています。そうでないと、ここだけだと、全体の中で、この石がどういう役目を果たすのか。例えば、造園家、庭師さんが、野村さんもそうですが、ここに飛石があって、正面に大きいのがほしいです。そうでないと納まらないです。そういう考え方が、あると思います。</p> <p>絵図から読み取れるのであれば、そういうところを重点的にやるために、もう少し飛石まで描いて。そういう方向での整理がいる</p>

	と思います。
平澤オブザーバー	1石ずつそういうふうに判断できるのであればいいです。今はたぶん、あまり考えなくやっている気がするのです。
高橋構成員	少し広い範囲といった時に、余芳の周辺計画平面図くらいの範囲までを具体的に検討して、この中で、どの石を優先して選ぶべきなのか。現状だと検討範囲があまりにも狭すぎるので。余芳の東側も含めて、全体の空間の中でどこを優先していくのかを決めて、そのうえで先に施工しなければならないもの、ということになると思います。私は、このくらいの範囲まで絵図とあわせて見たほうが、根拠としては説明がしやすいと思います。先生、いかがですか。
丸山座長	言われたとおりです。余芳からの眺め、園路からの眺め、先ほどの池からの眺めということで、説明されるときには、絵図から読み取れることで石を据えていますよ、という話になると思います。ただ単に、こうやってしまうと、平澤さんが言われるように、心配だというのは、もちろんとあると思います。
平澤オブザーバー	庭園の地割の骨格をなす石と、それを支える配石など、石の関係をこの絵図から読み取ってほしいです。高度なことが色々と組み込まれているからこそ、御城御庭絵図みたいなものまで作ったりしているわけです。工事上の都合を優先していたら目指している方向にはほど遠い仕事になります。
丸山座長	この絵で気になるのが、全部石がころころしていて。こういう表現しかできない。つまり石は動いているから、斜めに傾いているかもしれない。勢いになるなものが、ここには見られないから。これは、現場でやらざるを得ないところもあります。 平澤さんが心配されているのは、わかります。先ほどの高橋さんの意見もありますので。ここをどういう視点で、大きく石組を考えているというのを、何か書かれていないと。心配です。
平澤オブザーバー	繰り返し言いますが、権現山の東側の削られているところを造成するときに、石を据えたいと言いましたが、何にも考えなく、研究もしていないのに、適当にもってきたりとかしてはダメ。石を実際に据えるとすれば、石を選んでこないといけないから、時間的余裕もないからダメだと話をしました。
丸山座長	権現山のときは、そうでした。裾がよくわからないのに、据えてしまうのはおかしいということでやめました。
平澤オブザーバー	そのときから配石に関して何か研究が進んでいるかというのと、何も進んでいないのが実情だと思います。この際やるのであれば、絵図に描かれている石の描き方はどういう質を備えているのか。

	<p>おそらくこの絵図は、質的に信用できる部分は結構あります。石などいろいろ描いてあるわけです。</p> <p>それが何を意味して、他との照合で実際の整備に合理的な根拠として説明できるのか、という話だと思います。</p> <p>どの石がどの石に対応するのかを、資料2-4の絵図で見てみた場合に、例えば9番の石は燈籠が載っている石だからこれだろうとは思いますが。</p> <p>右下のところ、図面で6、7など下のほうに描いてありますけれども、数が合っていないし、石の形状も絵図に倣っていると思えません。1、2、3みたいなどころ、3石あるように描いてあるけれども、左側の杉と書いてある右側の山型の石のことなのか。</p>
丸山座長	<p>ここで重要なのは、絵図で白く抜いているところがあります。こことか、こことか、白いです。これは、三和土だと思っています。三和土がずっと石のところにも来ている感じがしています。それは、発掘ではでていたところもありますけれども、非常に微妙なところですよ。</p>
事務局	<p>このあたりで、よろしいですか。</p>
丸山座長	<p>そうそう、それは、下の池側の三和土だと思います。三和土でずっと固めているところの間に石を据えている。これは施工するときに決めなければいけないです。平澤さんが言われるように、絵図から読み取れて、こういう状況であるということを考えながらやらざるを得ないです。正面性とか、奥に置いてあって。園路に大きな石があって、小さな石があって、また大きな石があって、リズム感があります。ただ、この絵図を見て、出島になっているところは、このよう広くはないです、現在。この前も一緒に見てもらいましたが、もう少し狭いです。</p> <p>これは計画図だと思われまので、だいぶここは小さくなっているというのは、当然あるかと思えます。</p> <p>先ほどから何回も言いますが、石橋のあるところは杭です。擬木がでてきています。これも最後に言いましたように、施工の仕方が難しい。よくよく見ると、擬木をセットでつくっておいて、それを上にはめ込んでいる感じです。ずれています。現場でやっているのではなくて、ある程度造ったものを池のところに据えている工法をあちこちでやっているの、そのへんも検討しなければいけないです。</p> <p>もう少し、石のそれぞれの役割など、絵図を見て、限界はありますが、渡ってきて、一番最初に大きいのがあるのは、迫力があります。そういう視点の見方みたいなものによって、これを決めたことにしないことには、なかなかこうやりました、というのは理解されない面がありますので。高橋さんが言われたように、確かに余芳からどう見えるのか。この前も据え直してもらったときに、余芳からこの石をこう見せますということで、野村さんにも指示してもらってやった記憶があります。現場に行けば、なんとかなります。これを全体整備検討会議の中で言うにあたっては、こうなりました、というだけではなくて、今言った話を盛り込んでもらいたいと思</p>

	<p>います。限界はあると思いますが、考え方として、そういう考え方で石をやっています。今はまったくなくなっているから。ということで、お願いします。</p>
平澤オブザーバー	<p>いずれにしても資料2-4みたいな絵をいきなり示しても、何のことかわからないです。例えば、御城御庭絵図を見ると、飛石の正面に石があり、その左上に少し尖った石があつて、その左にまた大きな石がある。この関係で言うと資料中の4の石は無いように見えます。資料2-4の図は何を根拠に描いているのか。勝手にこのようにしたいことが描いてあるだけではないのかという疑いを感じます。</p>
丸山座長	<p>そうですね。</p>
野村オブザーバー	<p>時間が許せば、本当はこれをトレースして、僕自身でも展開図を描いてみたいと思います。</p>
平澤オブザーバー	<p>燈籠が載っている石の後ろに北側から延びている道があるじゃないですか。そここのところ資料2-4の絵だと適当にくっつけているだけです。このようなものがあるのか？という感じです。 園路が雪見燈籠の載っている石のところにもぶつかる仕上がりがありますか、っていう世界で、絵図をどう解釈したのか。 わからない所は、絵図を写せばいいみたいになっていて。 地割の構成をきちんと検討してほしいです。 概略を起こす必要もあるし、地割の要となる配石なのか、部分的な景をつくる景石なのかも全然解釈しないまま、資料2-4の絵は、野村さんも言われていましたけれども、ただ石がごろごろ置いてあるだけで、すごく心配しています。</p>
丸山座長	<p>今後のこともあるので、平面にある程度落としていける気はします。いきなりこうではなくて。絵図から見たら、こういう配石で、それに基づいてこうしたというやり方を、そんなに大した話ではないと思います。</p>
平澤オブザーバー	<p>作業を飛ばさず、きちんと積み上げていただきたい。</p>
仲副座長	<p>権現山的时候は、地形模型を作りながら検討しました。こちらのほうも、全体模型を作りながら、これを平面図にして。1個、1個の石は粘土のできるので。そういうのも入れてもらって。個人で造る新しい庭園だったら、現場に来てすぐできるかもしれないです。学術的根拠に基づいた復元をしていこうとするので。みんなが最終イメージを共有しておかないと、よくないと思います。</p>
丸山座長	<p>平面的にやるのは、たいしたことないです。</p>
野村オブザーバー	<p>先生が言われた、三和土ではないかというのは、案外そうだと思います。</p>

	<p>います。下のところに州浜のような感じになっています。砂利敷きかもしれないです。ということは、あそこの部分は高くなるよりも、谷になっているかもしれないです。</p>
仲副座長	<p>こっちを見ると谷と書いてあります。</p>
野村オブザーバー	<p>そうすると中に懐があって、もっとひだがいっぱいあって。景色としては、余芳から見ると、中間の、手前の景色、手水鉢があって近景だとすると、あそこが中景になって、石橋のあるあたりが遠景になって、近、中、遠の構成ができてはいるはず。そうするとここは、非常に重要なところ。逆にいうと、飛石の見付けのところになっています。ここには橋が飛んでいますけれども、絵図のほうにはもう少し広い、橋から観るときの景色にもなっています。3か所ビューポイントがあります。もう1度きちんと検討し直して、見どころとなるように景色をつくらないといけないと思います。案外、一番重要なところを、今やっているかもしれません。そういう意味では、もう1回慎重に考えましょう。そう願いたいと思います。もっとやらなければダメです。</p>
丸山座長	<p>ここは、さっき言いましたけれども、三和土が、ものすごく重要な役割をもっています。立ち上げているのもそうだし、擬木もそうですし、滝に水を流すところも、三和土で造形的にやっています。それは、ここに遺っていると思います。三和土の上に砂利を敷いたかどうかは、わかりません。そういう意味では、三和土の庭です。全体を見渡すと、三和土がなかったら、こういう庭はできていない。擬木もそうですし、擬岩、擬石もありました。</p> <p>これは別に、この絵ではなくて、平面図で大雑把にやってもすぐできる図だと思います。ここに至る過程みたいなものを、どういう考えでやったのかをだしてもらわないと。今日は、コンサル来ていないですか。そのあたりは、事務局のほうから、この根拠は何かの話をしてもらったかどうか。それでダメであれば、我々がこち来て、3、4人で、栗野さんが来てくれてもいいです。ここで、えいやあとやってもらっても。それはワーキングでやったらいいと思います。</p>
事務局	<p>先ほどの三和土の話も、手水の三和土の話もありますし。1度そういう機会を作らせていただきます。</p>
丸山座長	<p>職人さんを交えてやってもらっていいのも、よいと思います。</p>
事務局	<p>話題にあわせて、1回でやれば1回でやります。やりきれなければ複数回に分けて、護岸の日と、岩組み考える日と、分けてやらせてもらいます。</p>
丸山座長	<p>ワーキングで、図面描いて、3、4人でこうだろう、ああだろう、というのをやったほうがいいのかと思います。この石はなんだろうと。この石が全部このような石ではかっこ悪いでしょ</p>

	<p>う。1石、1石がどてどてってしているし。このような石ばかり集まらないから、現場でやってもできると思います。全体整備検討会議に向けて、護岸よりこっち側を先にしないといけないということと、クレーンの話もあるから。こういう考え方で、ここを先行します、という話をするわけです。</p> <p>だいぶ超過しましたけれども、この後現場を見せてもらえるのですか。</p>
事務局	お時間がよろしければ、この場所を見ていただきながらと思います。
丸山座長	次回、先生方、宿題で平面図か何か、宿題で描いてきてもらって、これでどうだと。
事務局	今日は、まず現地でご覧いただく時の参考になるように、これをコピーさせていただき、次回用の検討に参考にしていただくものは、分かりやすいのを考えて送りますので。
丸山座長	石の平面図の、各先生方のセンスもあるだろうから、描いてもらって、突き合わせてどうしようかって。これは5分もあればできるので。
高橋構成員	等高線いりで現況平面が欲しいです。
丸山座長	これ上手くいったら、順番に各先生方に平面図描いてもらって、検討して。
仲副座長	余芳のところでは整備するとき、3Dでスキャンしているのですか、現況の測量は。
事務局	手水のところはそうです。
仲副座長	全体はやっていないですか。庭園全体は。
高橋構成員	写真測量はされていなかったですか。
事務局	護岸は3Dです。上のほうになると、平面しかないです。
仲副座長	修理のときには、3次元にしながら、ひっくり返したり、起こしたりして、事前シミュレーションをします。それはできないのですか。
丸山座長	それはだして、石を動かしてやっていくのは、今広報の世界でもあるみたいですが。それぞれ、そこまでやるのかどうか、わかりませんが、わかりませんが。
事務局	これまで、そういう体制でやってきていないので、そこまでの準備が今はまだ。

事務局	それでは、部会としては以上で、いったん終わらせていただきます。長時間にわたり、先生方、ご議論ありがとうございました。
-----	--